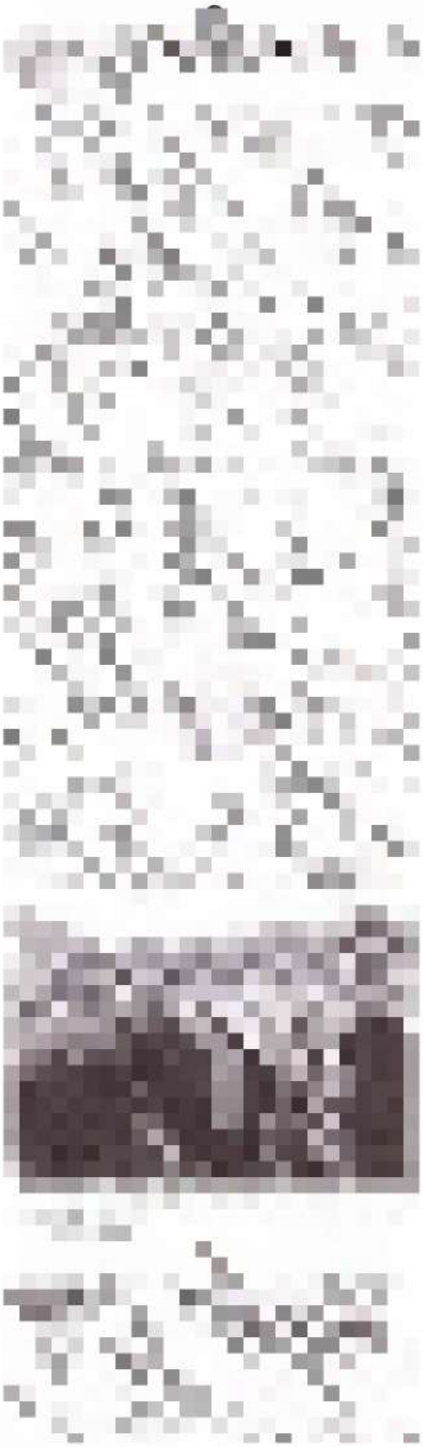
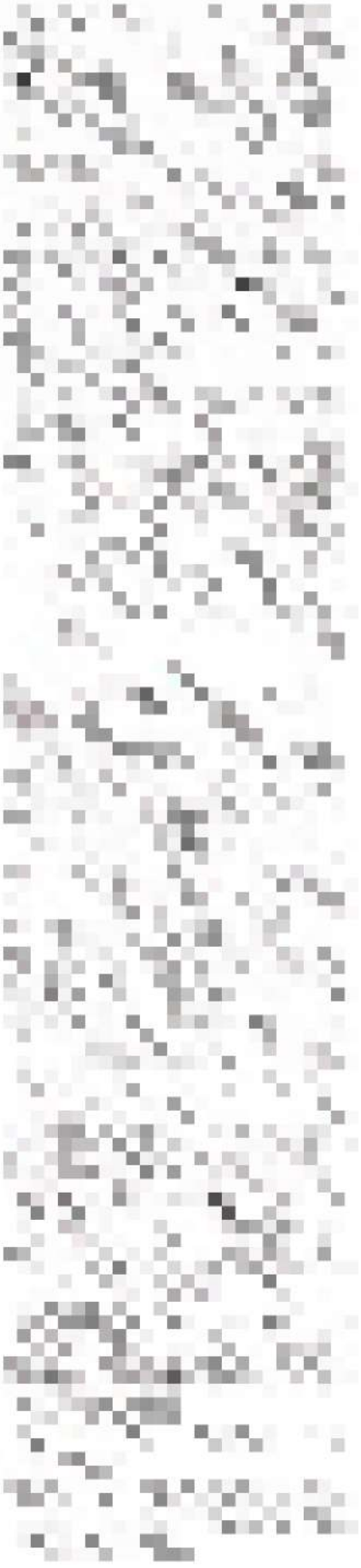
Opera バイエルン州立歌劇場《ルル》プレミエ上演

生々しい傷跡を強調したポスターが人目を引いていた《ルル》はミュンヘン・オペラ・フェスティヴァル前の最後の新演出として5月25日に初日を迎えたが、プログラムも下着姿の女性など際どい写真などがぼかされた11枚の透明ページから始まる手の込んだものだった。

マルリス・ペーターソン演ずるタイトル・ロールは安定した歌唱と、対照的に不安定なルルの精神状態を表現した演技で好演した。高音を叫んでも丸みを失わない声は艶を保ち、ヒステリックになり過ぎずに、さらに膨らんでいく可能性を秘めている。アルヴァ役のマティアス・クリンクも安心感のある歌唱を聴かせた他、画家と黒人役のライナー・トロスト、力技師のマルティン・ヴィンクラー、ゲシュヴィッツ公爵令嬢のダニエラ・シンドラム、ギムナジウムの学生レイチェル・ウィルソンも光っていた。

バイエルン州立歌劇場音楽監督であり、ベルリン・フィルの音楽監督にも指名されたキリル・ペトレンコは、アルバン・ベルクのオーケストレーションを明確に、かつ情緒すら漂わせて再現し、歌手への指示の出し方も明瞭だ。棒さばきも柔らかで、ベルクの音楽がギスギスしてしまうのを中和していた。

タイトル・ロールを歌ったマルリス・ペーターソン
写真提供＝バイエルン州立歌劇場

Scramble Shot

ガラス張りの舞台装置は、合唱団を人形のように見せたり、サスペンスの犯行現場のような白い線で人の形をマーキングしたり、登場人物の冷たい関係を露に見せる役割を担う。その舞台上の集中力は研ぎ澄まされたものがあり、終幕の長丁場で立っていたダンサーが二人も倒れるほどのパワーがあったが、それを何事もなかったかのように処理する冷静さに支配され、観客自身の力をも吸い取られるような公演であった。　（中 東生）